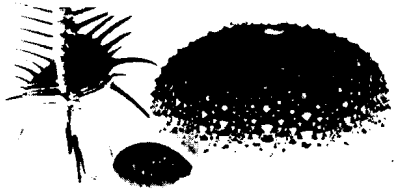
思い出すこと忘れえぬ人

桑原武夫

思い出すこと忘れえぬ人

桑原武夫



文藝春秋

思いだすこと忘れえぬ人
昭和四十六年三月二十五日第一刷
定価六〇〇円
著者　桑原武夫
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)一二二一
振替東京七八七四三
郵便番号一〇二
印刷　凸版印刷
製本　矢嶋製本
製函　加藤製函
万一乱丁・落丁の場合はお取替いたします

© 1971 Takeo Kuwahara　Printed in Japan
0095-331620-7384

目

次

第一章　幼年期の断片……7
第二章　港町での少年時代……26
第三章　京都錦林小学校時代……43
第四章　小島塾の二階の六畳……61
第五章　伯父さん列伝……78
第六章　不幸な友人たち……100
第七章　しらくもとグループ旅行……118

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第八章　古風な恩師たち……134
第九章　濫読の楽しみ……153
第十章　思い出のにわか師たち……169
第十一章　北海道の山旅……186
第十二章　あこがれの少女たち……202
あとがき……221

装幀　粟屋充

思い出すこと忘れえぬ人

第一章　幼年期の断片

「むかしの人は、言うべきことははっきり言うが、そのほかは無用の口をきかず、言うべきことも、いかにもことば少なくて意をつくした」という言葉で、日本最初のすぐれた自叙伝『折たく柴の記』は始まる。新井白石はついで、自分の父がいかに寡言であったかを述べたあとで、「そういうふうだったから、残念なことに、おたずねしたいと思うことも言いだしかねて暮らすうちに、なくなられたので、それっきりになってしまったことが多い。世間普通のことならば、それでもよかった。父や祖父のことがこまかにわからないのは残念だが、いまはもうたずねる人もない。この残念さを思うと、私の子どもたちも、また私と同じようになることもありうると覚った」。そこで白石は、子孫のために自分の一生を物語ろうとするのである。

とりとめもない思い出雑記を数カ月連載しようとするその枕に、大儒の不朽作を引合いに出すのは大げさにすぎようが、私もまた父母や祖父母のことでわからないことが多くて、残念に思うことがある。父は、日本における近代東洋学の樹立に多少とも貢献した一人だったから、その事跡は必ずしも家族的感傷的好奇心の対象にとどまらず、なんらかの形で学界ともつらなっているわけだ。昨年（一九六八年）末、完了したその全集の最終巻に、私は父の小伝と略年譜をつくったが、正確な日付をつかむことがいかに困難かということを改めてさとった。公務員としての辞令のたぐいは、公文書があるから疑いえないが、私的な日付となると、よほど重要なことでも、年がたつとわからなくなるものだ。

前に中江兆民の研究をしたさい、兆民に虎馬（とらうま）という早世した弟があることは周知のことだが、その死亡年月日はついにつかむことができなかった。虎馬の未亡人の甥にあたられる方にまでお頼みして、調べてもらったが、いまだに未解決である。私は歴史好きといっても、実証的考証学者としての素質に欠けているのではないかと反省もしてみたが、いまのところ、どう取りついていいのかわからないままでいる。人の記憶は不確かなもので、紙に書いておかぬ以上、心のなかでどのように哀歓の情をともなっていようと、特に数字など、年とともに剝落してしまうのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

こんど父の小伝と略年譜をつくって驚いたことは、父と母が何年何月に結婚したのかわからないことであった。現に私という人間が生まれており、父母は仲よく暮らし、ともに数え年六十三まで生きたのだから、結婚の日付など不明でよいのかも知れぬが、その不明を私自身がいままで意識せずにいたことはやはり変な気持であった。戸籍謄本では、隲藏は打它しんと明治三十六年十月二十六日に結婚を届出ているが、長男武夫は、翌年五月生まれである。月たらずということになる。しかし、これは驚くべきことではない。結婚式はするが、入籍の届出は、期間をおいてから、とくに懐妊が確かになってからすることが、最近まで慣習としてかなり一般的であった。じつは私自身もそうである。家内は不満のようだったが、私の母は古い慣習を変えようとせず、五月の結婚を十月になってから届出て、子供は四月に生まれた。母は自分と同じようにしたかったのかもしれない。

一組みの男女が新家庭をつくり、子孫が繁栄すれば、それでよいことであって、結婚式の日取りなど、重要でないと考えられるかもしれない。前向きの生活人として結構な考え方と思われる。しかし、自他ともに堅実な実証主義者と認めていた父については、そう簡単に不明ときめ込んでは悪いような気がした。

きちょうめんな父は、日記をずっとつけており、博文館の「当用日記」は、明治三十四年か

ら死ぬ年の昭和六年まで残っている。それを通読すれば、万事わかるはずと思うかもしれないが、それは日記に空白の日のないことを前提とする。私がこれを一ページ一ページめくってみようとしたのは、父の病歴を確かめたいと思ったからだったが、まったく不成功に終わった。父はがんらい蒲柳の質で、命をうばわれた結核のほか、中耳炎、胆石、丹毒など、命をおとしかけたことがたびたびあった。ところが、病臥中および予後の静養期間中は、父の日記帳は、思い切りよく空白のままになっている。事後の記入はいっさいしてないのであった。

結婚前後のころ、父は東京高等師範学校の教授であったが、春、夏、正月の休暇には、必ず越前敦賀の実家に帰省している。その帰省期間中は日記帳を携帯しなかったのか、まったく空白になっている。文献に記載のない史実は、あたかも存在しなかったかのように考えたがる歴史家を、私はここでもう一度ひやかしたくなったが、いま歴史家の立場にいるのは父ではなくて私なのだ。文字が頼りにならなければ、人間に頼る以外はない。

継体天皇が炭焼きをしていたと伝えられる越前の日野山のふもとに、鋳物師という七十戸ばかりの村がある。十二世紀に、勅勘にふれて越前の国に流された中納言がここに居をさだめて以来、そのままいまに及んでいる。屋敷も数百年前のまま昭和のはじめまで残っていて、当然

保護建築物になるはずのところ、やっと見のがしてもらった。私の従姉、つまり父の兄の長女、橿尾文子さんがここにとついでいる。私の身内で、昔のことを知っていそうな唯一の人である。この七十五歳の老婦人の家を私は二十年ぶりで訪ねてみようとした。

時雨がときどき降ってはまたあがる晩秋の北陸線を、それしかない各駅停車の二等車で行った。久しぶりでふるさとのなまりを聞きながら見る窓外の晴れ間の光にてらされた雑木林の紅葉の色は京都とは違って、わびしげに美しかった。それは私の感情移入のせいかもしれず、描写はひかえるが、改築してモダンになった玄関わきにたたずんで待ってくれた文子さんは、足が不自由というほか、まったく元気であった。

私の祖父、桑原久兵衛にとって、文子さんは初孫であった。一生を勤勉努力のうちにすごし、晩年、敦賀の旦那衆、おそらく十人のうちに数えられるところまでたどりついた製紙業者にとって、この孫娘は、目に入れても痛くない晩年の慰藉（いしゃ）であった。彼が中風で永眠したのは、文子九歳のときだから、もう何もかもよくおぼえているはずだ。私の父がその父を失ったのは、明治三十四年九月七日、そのとき久兵衛は数え年六十九であったことを、私はこんどの訪問ではじめて知った。

愛情のみがこうした正確な数値をおぼえさせることができるのだ。いや、そう言っては簡単

すぎよう。私の父は祖父のことを語るとき、目がしらの光らぬことはなかった。命日を忘れていたわけではなかろう。しかし、彼は無信仰であって、生涯家に神棚ないし仏壇を置かず、亡父のために供養をするといった考えに到達することはなかったので、母も私も、その日取りを知らなかったのだ。私にしてみれば、家にある古ぼけた、拙い肖像画でしか会ったことのない人の没年をきく気を起こさなかったとしても、自然であろう。

桑原家の祖先は、もと朝倉義景の家臣であったが、義景が滅びてから敦賀の御手洗(みたらし)に住んで、代々製紙業に従事してきたらしい。ここを流れる御手洗川は今はよごれて溝川のようになってしまったが、もとは清流で、明治中期まではアユもいたという。その水質がよいのでこの辺りにはガンピ、ミツマタなどを材料として鶏卵紙(とりのこがみ)をつくるものが多く、もとは紙屋町といった。そのほか近年、東洋紡などの大工場ができて、地下水をやたらに吸い上げるようになってから枯渇してしまったが、由来敦賀は掘抜井戸で有名であった。美しくゴボゴボと盛り上がるように湧いてくる清冽な冷水、それで一種粗野な葛まんじゅうをひやしておいて食べるのを「水洗まんじゅう」といったが、そのイメージは私には今もなつかしい。御手洗地区には掘抜井戸が多かった。これまた製紙に役立ったのであろう。

明治以後、洋紙に押されるなかで、最後まで転業しなかったのが鳥ノ子屋久兵衛であった。

その先代はどういう人であったか、ともかく酒を飲みすぎて若死したらしい。久兵衛は十六のとき家を継いでいる。十八のとき、大火で家を焼いたが、これにめげず、焼跡に二階建ての紅殻塗り京都風の家を建てた。当時敦賀の町家では、二階建てはほとんどなかった。久兵衛は万事進取の気象に富んでいたように見うけられる。

私の父の母は、疋田（ひきだ）村の長谷川氏から来たと従来私は書いてきたが、それは私の母ないし私の聞きぞこないであった。疋田の造り酒屋、長谷川家へは、久兵衛の弟が養子にいったのである。この人は、無上の遊びずき、釣りずきで、最後は、疋田川で鮎釣りをするうちに落命したという。久兵衛の妻は、東浦の比田村の田代太兵衛の娘で、そのあとを父の弟、勤（えい）三郎がついだのである。私の叔父はたしかに田代勤三郎なのだから、そう教えられて私は文子さんに反論することができなかった。名は不確実だが、やえといったらしい。子どもは女が数人あったが、みな早世して、聊（せい）一郎、隲藏、勤三郎の三人のみが育った。

私の父は、四つのときに母を失った。紙佐（中川佐太郎、「桑原武夫全集」第四巻三〇一ページ参照）という同業の紙屋の妻が、父の乳母役をつとめ、勤三郎は漁師まちへ里子に出された。ここでまた私はいままで錯誤をおかしていたことに思いあたった。久兵衛には妾があり、これが

家に入ったと書いてきたのである。これは過ちで、妾は最後まで家に入れられることはなかった。久兵衛は、そうしたケジメをきかすのが好きであったという。

彼は精励恪勤であったが、妻の死後は、家政を自分で切り盛りし、食事の献立もみずから考案し、それを女中につくらせたという。質素倹約を旨としたらしい。しかし、同時に謡曲の天狗であり、どれほど理解できたかは疑わしいが、熱心に漢文を勉強した。そのあらわれが、子どもにやたらにむつかしい漢字名まえをつける結果となったのだ。どこかうれしがり屋の、衒学趣味があったように見うけられる。文子さんは、おじいさんは厳格だが明るい人柄だったと言っている。エネルギッシュであったことはまちがいがない。

私の父に初恋の人があったことは、別に書いた。(「全集」第四巻四九二ページ)その後、博文館の大橋家から養子にと望まれたが、父は峻絶した。私の母、打它しんをすすめたのが郷党の先輩、刀根亀次郎であることは確かだが、それがどういう経過でまとまったかは、いっこうにはっきりしない。

父の日記は、「狩野君来訪」「実家より来信」「教授会出席」といった調子で、各行に一句ずつ一日数行書いてあるだけで、何を話したのか、何をしたのか、何が起こったのか、内容は例外的にしか記載されていないから、なにも実証できない。父は私生活に関するかぎり歴史記録

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com